

# 柏餅よその男の子を羨まず

藤田湘子

平成十一年、湘子七十三歳の作。五十七歳の時には「干蒲団男の子がなくてふくらめり」の作もある。

「鷹俳句会」は平成四年、営業的部門として「九段企画」を設立した。平成十年には湘子の娘が入社、大会の吟行運営等に参画し、後に投句も始めた。娘の述懐によれば、家族が俳句に関わる事を嫌っていた湘子だったが、何時の頃からか一人ぐらいは関わってほしいと考えを変え、最期の時に「俳句続けるからね」と言う嬉しそうに笑った、という。しかし湘子の死後十年、運営体制の変更があり、九段企画への業務委託は終了した。

「桜咲き虚子と立子のあはひかな」「麦穂波父と娘といふ構図」湘子の逡巡を感じさせる最晩年の句である。

1999年（二二作）第十一句集『てんてん』 鑑賞・野本京